

## 第 13 週 ポテンシャル

## 13.1 スカラー・ポテンシャル

$V$  をベクトル場とする。スカラー場  $f$  が  $V$  のスカラー・ポテンシャルであるとは、 $V = -\operatorname{grad} f$  が成り立つときにいう。ベクトル場  $V$  がスカラー・ポテンシャル  $f$  を持つならば、その回転は  $\operatorname{rot} V = -\operatorname{rot}(\operatorname{grad} f) = o$  を満たす。 $f, f_*$  が  $V$  のスカラー・ポテンシャルならば、 $f - f_*$  は定数である。

定理 ベクトル場  $V$  が空間全体で定義されていて、 $\operatorname{rot} V = o$  を満たすとする。このとき  $V$  はスカラー・ポテンシャル  $f$  を持ち、 $V$  の任意のスカラー・ポテンシャルはある定数  $c$  を用いて  $f + c$  と表される。

証明  $V$  のスカラー・ポテンシャルが存在することを示せばよい。 $V = (V_1, V_2, V_3)$  と表す。 $\operatorname{rot} V = o$  は

$$\frac{\partial V_3}{\partial y} = \frac{\partial V_2}{\partial z}, \quad \frac{\partial V_1}{\partial z} = \frac{\partial V_3}{\partial x}, \quad \frac{\partial V_2}{\partial x} = \frac{\partial V_1}{\partial y} \quad (1)$$

を意味する。空間の 1 点  $(x_0, y_0, z_0)$  に対し、スカラー場  $f$  を

$$f(x, y, z) = - \int_{x_0}^x V_1(x, y, z) dx - \int_{y_0}^y V_2(x_0, y, z) dy - \int_{z_0}^z V_3(x_0, y_0, z) dz$$

で定める。このとき  $\frac{\partial f}{\partial x} = -V_1$  は直ちにわかる。また

$$\begin{aligned} \frac{\partial f}{\partial y}(x, y, z) &= -\frac{\partial}{\partial y} \left( \int_{x_0}^x V_1(x, y, z) dx \right) - V_2(x_0, y, z) \\ &= - \int_{x_0}^x \frac{\partial V_1}{\partial y}(x, y, z) dx - V_2(x_0, y, z) \\ &= - \int_{x_0}^x \frac{\partial V_2}{\partial x}(x, y, z) dx - V_2(x_0, y, z) \\ &= -V_2(x, y, z) \end{aligned}$$

が、微分と積分の順序交換および (1) の第 3 式を用いてわかる。同様に

$$\begin{aligned} \frac{\partial f}{\partial z}(x, y, z) &= -\frac{\partial}{\partial z} \left( \int_{x_0}^x V_1(x, y, z) dx \right) - \frac{\partial}{\partial z} \left( \int_{y_0}^y V_2(x_0, y, z) dy \right) - V_3(x_0, y_0, z) \\ &= - \int_{x_0}^x \frac{\partial V_1}{\partial z}(x, y, z) dx - \int_{y_0}^y \frac{\partial V_2}{\partial z}(x_0, y, z) dy - V_3(x_0, y_0, z) \\ &= - \int_{x_0}^x \frac{\partial V_3}{\partial x}(x, y, z) dx - \int_{y_0}^y \frac{\partial V_3}{\partial y}(x_0, y, z) dy - V_3(x_0, y_0, z) \\ &= -V_3(x, y, z) \end{aligned}$$

が、微分と積分の順序交換、(1) の第 1 式および第 2 式を用いてわかる。以上から、スカラー場  $f$  は  $\operatorname{grad} f = -V$  を満たすことがわかり、従って  $f$  は  $V$  のスカラー・ポテンシャルである。□

注意 上の定理において、ベクトル場は空間全体で定義されている。一方で、例えば空間全体から  $z$ -軸を除いた部分（以下、 $D$  で表す）で定義されたベクトル場

$$V(x, y, z) = \left( -\frac{y}{x^2 + y^2}, \frac{x}{x^2 + y^2}, 0 \right)$$

は  $\operatorname{rot} V = o$  を満たすが、 $D$  上でスカラー・ポテンシャルを持たない。しかしながら、 $D$  の一部分  $D' = \{(x, y, z) \mid x > 0, y > 0\}$  においては、 $\tan^{-1} \frac{x}{y}$  は  $V$  のスカラー・ポテンシャルである。

## 第 13 週 ポテンシャル (続き)

## 13.2 ベクトル・ポテンシャル

ベクトル場  $V$  に対し、ベクトル場  $W$  が  $V$  のベクトル・ポテンシャルであるとは、 $V = \operatorname{rot} W$  が成立つときにいう。ベクトル場  $V$  がベクトル・ポテンシャル  $W$  を持つならば、その発散は  $\operatorname{div} V = \operatorname{div}(\operatorname{rot} W) = 0$  を満たす。 $W, W_*$  が  $V$  のベクトル・ポテンシャルならば、 $W - W_*$  の回転はどの点でも 0 である。

**定理** ベクトル場  $V$  が空間全体で定義されていて、 $\operatorname{div} V = 0$  を満たすとする。このとき  $V$  はベクトル・ポテンシャル  $W$  を持ち、 $V$  の任意のベクトル・ポテンシャルはあるスカラー場  $f$  を用いて  $W + \nabla f$  と表される。

**証明** 前節の定理を踏まえると、 $V$  のベクトル・ポテンシャルが存在することを示せばよい。 $\operatorname{div} V = 0$  は

$$\frac{\partial V_1}{\partial x} + \frac{\partial V_2}{\partial y} + \frac{\partial V_3}{\partial z} = 0 \quad (2)$$

を意味する。スカラー場  $W_1, W_2$  として

$$\frac{\partial W_2}{\partial x} - \frac{\partial W_1}{\partial y} = V_3 \quad (3)$$

を満たすものを取る。このとき (2) および (3) を用いて、

$$\frac{\partial}{\partial x} \left( V_1 + \frac{\partial W_2}{\partial z} \right) = \frac{\partial}{\partial y} \left( -V_2 + \frac{\partial W_1}{\partial z} \right) \quad (4)$$

を得る。スカラー場  $P, Q$  を

$$P = -V_2 + \frac{\partial W_1}{\partial z}, \quad Q = V_1 + \frac{\partial W_2}{\partial z}$$

で定める。このとき (4) から、 $\frac{\partial P}{\partial y} = \frac{\partial Q}{\partial x}$  がわかる。スカラー場  $W_3$  を

$$W_3(x, y, z) = \int_{x_0}^x P(x, y, z) dx + \int_{y_0}^y Q(x_0, y, z) dy$$

で定める。このとき

$$\frac{\partial W_3}{\partial x}(x, y, z) = P(x, y, z) = -V_2(x, y, z) + \frac{\partial W_1}{\partial z}(x, y, z) \quad (5)$$

がわかり、また

$$\begin{aligned} \frac{\partial W_3}{\partial y}(x, y, z) &= \int_{x_0}^x \frac{\partial P}{\partial y}(x, y, z) dx + Q(x_0, y, z) \\ &= \int_{x_0}^x \frac{\partial Q}{\partial x}(x, y, z) dx + Q(x_0, y, z) \\ &= Q(x, y, z) \\ &= V_1(x, y, z) + \frac{\partial W_2}{\partial z}(x, y, z) \end{aligned} \quad (6)$$

が、微分と積分の順序交換および  $\frac{\partial P}{\partial y} = \frac{\partial Q}{\partial x}$  を用いてわかる。(3), (5) および (6) から、ベクトル場  $W = (W_1, W_2, W_3)$  は  $V = \operatorname{rot} W$  を満たすことがわかり、従って  $W$  は  $V$  のベクトル・ポテンシャルである。□

**注意** スカラー・ポテンシャルに関する定理と同様に、ベクトル・ポテンシャルに関する上の定理において、ベクトル場  $V$  は空間全体で定義されている。 $V$  の定義域が空間全体ではない場合、 $V$  が  $\operatorname{div} V = 0$  を満たすとしてもベクトル・ポテンシャルを持つとは限らない。